
俺は俺らしく生きていく

銀舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は俺らしく生きていく

【Nコード】

N7399A

【作者名】

銀舞

【あらすじ】

銀魂のパロ(?)です。オールキャラのギャグ・シリアス。

其の一・早くも虫の息。(前書き)

集英社・および関係者には一切関わりがありません。
オリジナル銀魂小説です。

其の一・早くも虫の息。

「……ひまアル。」

大の字になつて寝そべり、一言放つた少女、神楽。

「どうしたの？神楽ちゃん。悪いけど、相手してるひまはないよ。」
お茶をすすりながら冷静に対処するツツコミ。いや、新八。

「ダメガネ。お前、育ち盛りのいたいけな少女を見殺しにするつもりアルか？」

だから何時までたつても新八なんだヨ。

なんだヨ”ぱち”って？」

ブーブー文句を言つて来る神楽ちゃんにも、もうなれちゃったなあ……。

それにしても、銀さん遅いな……ジャンプ買つて来るって行つたきり全然帰つて来ないや……。

口座には千円ぼっちも入ってないのに……いや、今の状況からして、千円未満も大金か……。

はああああ……と、え？これ口から魂抜け出てない？ってな具合の深い溜息を吐いたダメガ
新八。

そこに、ガラガラッ 玄関の引き戸を開ける音が響いた。

あ……銀さん帰つて来た。

ズズズとお茶を再度すすり、扉に目をやる。

「おう。銀さんが帰つて来ましたよ。」

ひょうひょうと部屋に入ってきた。

「お帰りネ銀ちゃん！何か、土産ないアルか?!」

輝いてるなあ、神楽ちゃん……。

僕も、あの純粋な心がほしいよ……。

「ところで銀さん。何してたんですか？あんまり遅いからパチンコでもやってるんじゃないかって、半ば呆れてましたよ。」

メガネの奥で、冷やかな目線をおくりながら、新八は銀時を見上

げた。

「なっ・・・！！ま、まさかあ！家には育ち盛りの子供が2人も居るんだぜ？それをわざわざ見殺しにするようなマネ、銀さんしないよ〜！」

やだなあ新八くう〜ん！はっはっはっはっはっはっは！！！！・・・
・・・し、新八くん？」

銀さん 神楽ちゃんと同じ事言ってる・・・。

汗ジトになっている銀さんを横目で見ながら、新八は思うわけだ。

ツッコミが一人つてのも・・・苦勞多いんだな・・・
・・・。

今回、ろくなツッコミも出来なかったメガネ男は、ギャグ小説の大変さを思い知った。

其の一・早くも虫の息。(後書き)

これ、お前の事だろ。と、見下されそうですね。
はい。すでに虫の息が聞こえます。

其の二・こっちもこっちで大変なのよ。(前書き)

ひたすらアホやっています。

其二・こつちもこつちで大変なのよ。

「近藤さん。何かいつの間にか第二話まできつちやてますぜい」

「ああ。しかも、真選組と言うワードが一つ言も出てきてねえ。」

「どうするんです？このままじゃ、俺らの出番ありませんよ」

「うおっ！なんでい山崎。いたのかい」

「な・・・し、失礼な・・・」

「いやあしかしだ、こりゃ、切実な問題だ。そんなに引っぱりにくいキャラだったか？真選組って・・・」

「ここあ一つ、強引にでも小説に入り込むとか。」

「でも、小説だから、たとえその場面に居たとしても、作者が説明しないとけませんし、台詞も一々言わないと・・・」

「銀舞とかなんとか言う子が書くんだろ？」

「ええ。らしいですね。」

「・・・っか・・・何してんの？お前ら・・・」

「おお！トシィ、実はなあ〜」

「や、ずっと聞いてたから。横で。」

「なんでい、土方さん。土方さんも ”真選組血風張” に出たいんですかい？」

それなら言ってくれりゃ良いのに・・・土方コノヤロー。」

「なんだその言い草は。」

「じゃあよ、こう言うのはどうだ？本誌とは違う名前にして、インパクト持たせる！！」

「ゴリラ13・ソウゴ13・サガル13・マヨラ13。」

こんな感じですか？」

「ちよつと山崎くん？！何で俺ゴリラ?!」

「本誌ではこうだったじゃねえですか。」

「本誌と違っつて言っただじゃん！」

「男がこまけえ事気にすんなよ。近藤さん。」

「ええええ？！トシまで？！！」

「・・・・・・・・あれ・・・・・・・・？ちよつと待つて下さいよ皆さん！よく考えたら・・・・・・・・コレ・・・・・・・・説明文がありません！」

小説つて、何がその場で起きてるか分からないから、その、さっきも言った様にですね、一々表わしていかないと読者に伝わらないつて言うか、

ん〜何て言えばいいだろ。その・・・。

あっ！そうですね、あの、台詞だけじゃ分らないですよ！！」

『マジで？』

「ええ、近藤さんがしゃべった後、続けて俺がしゃべったじゃないですか。その時も読みにくかったでしょ？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

* 作者が一番苦しんだ *

其三・どす黒い青春(前書き)

新八の甘い恋・・・。
んな訳あるか。

其の三・どす黒い青春

ある日の昼下がりに。

万事屋銀ちゃんは今日も退屈。

「うん。やっぱり真選組じゃない。」

どこから調達したのか、ボロボロの上バカでかいパソコンを見つめながら断言する銀時。

「……なんですか、いきなり……。」

新八がテレビ画面から銀時の方へ目を移す。

「だから、真選組の奴らを小説内に出すとろくな事がねえ。

つーわけで、真選組じゃない。」

「……いや、失礼でしょ。真選組の方々に……。」

それだけ言うと、再度テレビ画面に食いついた。

「いやいやいやいや新八くん。もっといいツッコミ期待してたのに・

……第一話から君のツッコミ冴えないって、姉上も言ってたぜ？

どうしたよ？また実らぬ恋か？ん？」

「実らぬ恋とか、勝手に決めつけしないで下さいよ。僕にはお通ちやんだけです。」

ムツとなりながらも、新八の目は虚ろだ。

「新八。お前がツッコまないで、一体誰が銀ちゃんにツッコむアルカ？」

「おい、何で俺限定なんだ？オイ。ボケならお前もだろーが、チャイナコラ。」

「ほらネ。銀ちゃんツッコミだと良いことないヨ？」

「んだ？こら、てめえ給料から酢昆布代ぬくぞ。」

「フンッ。銀ちゃんこそ、パフェ食えない様にしてやるネ。」

新八の後ろでまた醜い争いが始まった。

だが、一向に目は死んだままだ。

銀時が先ほど言った様に新八は

誰かに恋したのだ。

はあゝ……だめだ……。

あの人の事考えるだけで溜息が止まらないよ……。

嗚呼、胸の鼓動が聞こえる……。

どくっ どくっ どくっ どくっ どくっ どくっ どくっ どくっ ……

…

新八は思う。

これは……重症だなあ……
と。

其の四・新八なりの、抑え方。(前書き)

恋する新八、今日も行く。

つっても普通に万事屋なんだけど。

其の四・新八なりの、抑え方。

「はぁ・・・」

誰かが、また溜息をついた。

『誰かが』とか言っても、大体予想はつくだろう。

お馴染み新八である。

エロメスちゃんの時以来だ。

お通ちゃん以外の女の人に一目惚れするなんて・・・。

イ、イカンイカンイカン！

僕はチャラ男なんかじゃない！

僕にはお通ちゃんだけなんだああああ！

で、でも、絶対お通ちゃんだけじゃなきゃいけないって理由も

無い・・・ハッ！

イカンイカンイカン！！

寺角通親衛隊長の僕が、お通ちゃん以外の人を好きになって

どうするううう！？

このままじゃ、僕の所為で隊が崩れる！

終わってしまうううううう！！

どんどんマイナス思考になる新八。

心の中で叫ぶうち、何時しか万事屋の前にいた。

ああ・・・またツツコミが冴えない！とか、言われるんだろう

なぁ・・・

カン カン カン カン

ゆっくりと階段を登る。

と言っても、そんなに長い階段じゃないので、すぐ玄関にご対面だ。

ガラガラッ

「お早うございませう．．．はあ．．．」

玄関の戸を開け、ダルダルと部屋の中に新八は入る。

「？．．．あれ、銀さん？神楽ちゃん？」

居ないの？

おかしいな．．．」

いつもなら、神楽ちゃんだけでも居るのに．．．。

すると、奥の部屋から

ブリッ．．．ブリッ．．．と、何か、紙を破り捨てるような音が聞こえた。

其の五・意気投合できる友達を持って。

部屋の奥へ進んだ新八は、見た。
怪しい音の正体を。

ビリッ・・・ビリッ・・・

「ぎ、銀さん?!」

新八の目の前には、ひどく虚ろな目をし、口をボンヤリ開けて日めくりカレンダーの一枚一枚を破り捨てる銀時の姿があった。

.....

「どうしたんですか？銀さんらしくありませんよ？」

「・・・あゝ・・・？」

うなだれるまま。

何の反応も見せない銀時。

「しつかりするヨロシ、2人共。」

酢昆布をクチャクチャさせながら、神楽が割り込んできた。

「ボケもツツコミも、フラフラしてたら勤まらないネ。

それでも男アルカ？」

「いや、男関係ないから。」

一旦念を押して、新八は続けた。

「銀さん、何かあったんですか？」

「・・・あゝ・・・それがよお、新八くん・・・」

新八は、まじまじと銀時の台詞に聞き入った。

「・・・俺　　恋しちゃったのかもしんない。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7399a/>

俺は俺らしく生きていく

2010年10月28日04時56分発行